

下関市立大学 鯨資料室だより

Vol.3



海峡の英知。未来へそして世界へ。

公立大学法人

下関市立大学

Shimonoseki City University

〒751-8510

山口県下関市大学町二丁目1番1号

TEL. 083-252-0288 FAX. 083-252-8099

www.shimonoseki-cu.ac.jp

発刊■2011.3.1

発行■下関市立大学附属地域共創センター

第3回

鯨資料室シンポジウム開催！

平成23年2月5日(土)13時30分より16時まで、下関市立大学B講義棟223番教室において、第3回鯨資料室シンポジウム「日本とくじら」を開催しました。今回は、江戸時代から明治前期までの日本捕鯨の歴史的な側面を明らかにすることをメインテーマとし、基調講演及びパネルディスカッションの2部構成で、市民や学生など約70名の参加者がありました。

第1部は、福岡市博物館学芸員の鳥巢京一氏による「近世・近代初期の西海捕鯨と下関」と題した基調講演を行いました。福岡市博物館で今秋開催される特別展覧会の展示企画に沿った形で、太古の進化や形態学など生物学的観点か

ら見た鯨、簡潔な捕鯨の歴史と捕鯨技術、民俗芸能や食文化を含めた日本の鯨文化に関する概説の後、鳥巢氏が専門とする平戸や壱岐、長門にかけての対馬海峡域における西海捕鯨について社会経済史的な側面から解説があり、下関についても幕末に鯨製品を取り扱った肥後屋・油屋・伊勢屋などの商人が存在したことや、近代になって商品の流通基地から捕鯨基地へと変化する経緯などについても言及されました。

第2部のパネルディスカッションは、本学櫻木晋一教授の司会で3名のパネリストが第1部の講演内容に対する補足と質問を行い、それに鳥巢氏が答えていく形で進められました。



基調講演 福岡市博物館・鳥巢京一氏



会場の様子

日本鯨類研究所の大隅清治顧問は、幕末に米国の捕鯨船団が日本海近くで捕獲した鯨種や、北前船で運ばれた塩蔵鯨、日本の捕鯨が近代化を迫られた状況について、甲南女子大学森田勝昭教授は、アメリカの捕鯨船の航海日誌に基づき、米国東海岸から南下東進し、北上して遠路日本に来て箱館を基地とする捕鯨活動の実態や、現代捕鯨についての紹介と、近代に入り古代捕鯨で遅れをとっていた下関がいち早くノルウェー式捕鯨法を導入し、近代捕鯨基地として栄えた経緯について説明がありました。本学委嘱研究員である岸本充弘氏からは、西海捕鯨と長州捕鯨の差異についての質問、本学の鯨資料室が充実しつつあることの紹介、今後の資料収



パネルディスカッション

集に対する協力要請と、これらの資料を有効活用した研究成果の創出への期待が語られました。質疑応答では、会場の市民からも様々な意見が寄せられ、活発な議論が行われました。

下関市立大学鯨資料室 収蔵品の紹介



「イワシ鯨の頭骨」

この頭骨は昭和32(1957)年、大洋漁業(株)(現・(株)マルハニチロホールディングス)から下関市に寄贈されたもので、旧下関水族館が所有し新水族館(海響館)に引き継がれた後、本学鯨資料室設置に伴い本学に寄託されました。

当初長府関見台公園にある鯨館の下に、イワシクジラの全身骨格標本として展示してありましたが、長い年月の間に風雨にさらされたため劣化し、頭骨だけが残ったものです。頭骨ですが、台座を含めて300キロを超える重量があります。

テレビ東京系のテレビの根強い人気番組に、「開運なんでも鑑定団」がある。筆者もこの番組のファンの一入であるが、コレクターの蒐集に対する執念の深さと、鑑定人の専門知識の広さに、何時も感心している。普通に生活している市民が、素晴らしいコレクションをしている、その意外で、地道な、努力に心を打たれるのである。

クジラは、ヒトと遠く掛け離れて、水の中だけで生活する大型哺乳類であり、動物学的に興味深い上に、太古からヒトの生活を支えてきた、経済的にも文化的にも、有用な動物である。それ故にクジラは、ヒトにとってとても魅力的な存在である。

そのような魅力に惹かれて、クジラや捕鯨に関連するコレクションに執念を燃やし続けている人が、筆者の周りにも数多くおられる。

その一人は、ドイツのケルン市に在住する、クラウス・バーテルメスさんである。筆者は彼のお宅を2回訪問したことがあるが、その度に彼のコレクションの豊富さと質の高さに驚嘆している。彼は集合住宅の中の自宅とは別に、コレクション専用の部屋を持ち、クジラと捕鯨関係の書籍は勿論、絵画、細工物、捕鯨器具等、幅広い分野の資料や標本が、2つの部屋をぎっしりと埋めている。彼は、クジラに関係があれば、何でも集める。彼が日本のある捕鯨基地を訪問した時に、使用して破壊した捕鯨銛先を処理場の片隅から探し出して、得意げな顔をしたのには、驚くよりも、呆れてしまった。彼は資料・標本をただ集めるだけでなく、それらを整理し、研究して、多くの関連著書を発表するとともに、世界のクジラコレクター仲間と広いネットワークを築いて交流し、定期的に彼らを召いて、シンポジウムを主催している。

もう一人は、東京在住の、細田徹さんである。彼も、バーテルメスさんに負けない、優れたクジラグッズコレクターである。特に日本の古式捕鯨とクジラの郷土玩具に関係する蒐集品は、素晴らしい。筆者が一度バーテルメスさんを細田さんのお宅に案内した際に、彼は沢山の資料を鑑賞するのに夢中になってし

まい、なかなか帰ろうとしないので、やきもきさせられたことがある。彼は「勇魚文庫」を主宰して、良く勉強し、雑誌「鯨遊」を編集、発行している他に、全国のクジラグッズコレクターが自慢の品を持ち寄って毎年開催される「鯨展」では、世話役を務めてくれている。さらに、コレクターにあり勝ちな、蒐集品を死蔵することなく、全国の博物館で時折開催される、クジラ関連の企画展では、彼の蒐集品を進んで提供して、頼りにされている。

しかし、個人の蒐集努力には、当然ながら限界がある。下関市が共同船舶株式会社から提供を受けて、岸壁に係留して展示している、技術遺産である捕鯨船・第二五利丸や、海響館がノルウエーのトロムソ大学博物館から貸与されている、科学遺産のシロナガスクジラの全身骨格などは、個人で蒐集、収蔵することは不可能な標本の例である。

資料や標本は、努力して絶えず蒐集しないと、失われがちである。まして捕鯨活動が停止させられている現在では、それに関連する機械、機具、資料、標本、文献のみならず、捕鯨の技術や文化までが急速に失われつつある。

北浦捕鯨と近代捕鯨の輝かしい歴史と伝統を持つ下関市に設立されている市立大学鯨資料室がセン



大隅清治（おおすみ・せいじ）

1930年群馬県伊勢崎市生まれ。

1958年東京大学大学院生物系研究科博士課程修了。農学博士。

財団法人鯨類研究所所員、水産庁・東海区水産研究所研究室長、水産庁・遠洋水産研究所研究室長、研究部長、企画連絡室長、所長を歴任した後、財団法人日本鯨類研究所常勤理事、専務理事、理事長を経て、現在同研究所顧問、太地町立くじらの博物館名誉館長、(財)東京水産振興会評議員。

勲四等瑞宝章、ノルウエー王国功労勲章を受章。

著書に、「クジラは昔陸を歩いていた」(PHP研究所)、「クジラと日本人」(岩波新書)、訳書に、「鯨とイルカの生態」(東大出版会)他。

ターになって、個人の努力だけでは無理な、規模の大きい鯨資料の収集と、それに基づく研究を推進するばかりでなく、その成果の普及と交流活動に積極的に取り組むことを、大きく期待する。

連載 第5回 下関と鯨を検証する

下関市立大学地域共創センター 委嘱研究員 岸本充弘

下関市内には鯨関係の史跡が多数あります。しかし、下関の鯨との関わりは主に近代捕鯨以降の鯨産業を中心としているところから、このシリーズで以前ご紹介しました旧日本捕鯨別館や旧林兼造船ドック、現在は取り壊されてしまいましたが旧大洋漁業本社建物等の産業遺産と呼ばれているものがたくさん存在しています。一般的に産業遺産とは「産業界において活躍した遺物や遺産」のことを総称して言いますが、下関の場合は日本3大捕鯨会社である日本水産(株)や大洋漁業(株)の発祥地であり、これらの産業遺産は「鯨産業遺産」と呼べるにふさわしいものであると思います。その鯨産業遺産の1つが、今回ご紹介する「鯨館」です。

この鯨館は昭和24(1949)年まで下関市に本社を置いていた大洋漁業(株)(現・(株)マルハニチロホールディングス)が、昭和33(1958)年に旧下関水族

館横の長府関見台公園にシロナガスクジラの原寸大(全長25m)で建築し、下関市に寄贈したものです。当初、隣接する旧下関水族館の施設の一部として利用され、鯨の解剖刀、標本やパネル等が展示してありましたが、現在展示品は新水族館(海響館)や水産課等に引き継がれ、残念ながら内部は公開されていません。すぐに故障してしまったようですが、当初はコイン式の噴水装置もあり、遠足等で高台に上がられて、鯨館の窓から関門海峡を眺めたというご記憶の方も多いことと思います。

鯨館が建築された昭和30年代と言えば我が国商業捕鯨の全盛期であり、鯨館は下関の水産都市としての全盛期を象徴する建物でもあります。鯨館は捕鯨の栄枯盛衰をどのような気持ちで見続けてきたのでしょうか、そして、これからも・・・。



鯨館(下関市長府関見台公園)

※第4回「下関と鯨を検証する」の中で、本文7行目1946(昭和28)年、本文8行目1953(昭和35)年とありましたが、正しくは1953(昭和28)年と1960(昭和35)年です。お詫びして訂正いたします。

鯨資料室では、鯨に関する資料の収集を行っております。資料をお持ちの方で資料室にご恵贈いただける場合は、右記までご連絡ください。資料は、展示準備ができ次第、随時資料室に展示いたします。また、研究者の調査研究にも貢献できる資料室を目指して参りたいと思いますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

公立大学法人下関市立大学
附属地域共創センター鯨資料室

751-8510

山口県下関市大学町二丁目1番1号

電話 083-252-0288(代表)

083-254-8613(直通)

F A X 083-253-1622(代表)

<http://www.shimonoseki-cu.ac.jp/whale/chiikikyoso@shimonoseki-cu.ac.jp>